

# もの知り博士



映画「おくりびと」は、青木新門著の「納棺夫日記」が原案となって映画化され、米国アカデミー賞外国語映画賞を受賞したと新聞やテレビで持ち切りだったので、いつも誘い合う友達と映画館へと連れ立って行った。映画館の周りは、人、人、人で埋まり、珍しく行列をしていた。当日は女性デーで1,000円だった。

それから6月14日原作本「納棺夫日記」の著者として青木新門氏が名古屋のNHKで特別招聘で講演をするというので、何十年ぶりにお会いしたいと思い出かけることにした。

新門さんの「納棺夫日記」は、文春文庫で第一刷の初本であって、1993年5月6日と記入してある。多分筑波から人形町の会社へ通勤していた頃だろうか。

その昔、青木さんは、2、30歳代頃だったろうか、富山中央郵便局の裏通りの2階で「すからべ」というパブ喫茶のマスターで、詩人や画家達が毎日のように集まって飲んでいて。経営が悪いということなど聞いたこともなく、いつも満員であったように思う。ただ私の勤めていた役所に1カ月近く午前中に通って来て、占い師に見てもらったら私と共同でやればよいと私を口説いたが、公務員を辞めてまで不安定な世界に移る気はなく断っていた。断るにつけてお金を貸して欲しいという事で、安い給料の中から貯金していた全額を渡した。その9万円という金額も、資料を整理していて新門さんの借用書が出てきたから分かった。私は長い間もっと2、30万かと思っていた。借用の時の手紙もあった。当時は給料も安く、とても生活苦であったし、給料も2回払いで借金の連続だった。

母は私が小学生の頃から、下新川の人達は皆、人柄はよく真正直だと言っていた。だから、今でも私の知っている下新川の人々は、真正直な偽りのない生活を送っている人達だと信じている。祖先や親たちを見て育った人々が寸毫すんこうもなく生きているからだと思はる。

青木さんが感動する事、そして納得して生き

て、安心して死ねる世界、納棺夫という生と死に限りなく近づいて死ねる世界は羨ましい。彼は少年時代、弟や妹を中国で餓死させたという悲しい体験の中から得たものであろうけれど、私は生まれてすぐこの人を支えてきた人となりだと信じている。

NHKの講演会は、狭い部屋にびっしり詰まっていた。300人以上いただろうか。35分延長して講演会は終わったが、すぐ柱の影にいた私を抱いてくれた。皆は一言一言体験談に目を輝かしながら聞いていた。本木雅弘君からは、電話がかかって5年間音沙汰なく10年近くなって映画化が実現したと聞いた。先週、松竹が東宝を抜いて「おくりびと」の上映で黒字に転換したと新聞に載っていた。

最初の「納棺夫日記」の初版は500部、15年間に15万部、今年は40万部で第22刷になっていた。

この成功はやはり「すからべ」をつぶしてしまふことになったにもかかわらず、代金を請求することもなく黙って耐えた性格は「おくりびと」以前に人柄として作られていたような気がしてならない。

文春から500円位で出版されているから是非青木さんの文学の基も知って欲しい。

(兼久和子)

